近世から近代の八幡宮案内図と案内記

東　　昇

1．近世から近代への３枚の絵図

石清水八幡宮に関する絵図は、神社の建物図面、境内図など数多く存在する。それらは『石清水八幡宮 諸建造物群調査報告書』（本文編）の巻末に収録されている。今回、このなかから八幡宮と周辺の施設、参詣人などを描いた「八幡宮案内図」と一括できる絵図群について紹介する。特に、幕末から明治にかけて、近世から近代への変化が詳細に描かれた３枚の絵図を比較する。この絵図は、A慶応２年（1866）「城州八幡山案内絵図」、B明治11年（1878）「山城国綴喜郡男山八幡宮全山図」、C明治43年（1910）「官弊大社男山八幡宮全図」である。

これらの絵図の分析は、第Ⅰ部の「石清水八幡宮の二つの大砲」で詳細に述べているので、ここではまず絵図の作成時期、作者、様式の情報について記す。次に絵図と「八幡山名所案内記」「男山考古録」などの案内記や地誌の文字情報との関連性について説明する。すでに①②については、先の報告書で竹中友里代氏によって紹介されているので、その解説を参考とする。

A「城州八幡山案内絵図」（個人所蔵、34.6×47.7㎝）は、左下に「男山麓長浜家蔵板」とあるのみで、年号が記されていない。しかし後述する慶応２年（1866）「八幡山名所案内記」が長濱尚次によって記されていること、項目が図中の注記と一致するため、同じ慶応２年と推定できる。ただし描かれる建物の建築年代を検証すると、この時期にすでにあるべきものがないなど、慶応２年当時の景観を描いたものではない。近世後期に作成した版をもとに、「八幡山名所案内記」の出版とあわせて、再版されたものと考えられる。絵図に関する情報として、方位が北のみ、右上には年中行事、また左下には長濱尚次のものと思われる印がみえる。

B「山城国綴喜郡男山八幡宮全山図」（八幡市教育委員会所蔵、38.0×51.0㎝）は、明治11年９月13日出版御届、同年９月14日彫刻出版とあり、Aから12年後の出版となる。明治３年男山祭と改称された放生会（現在の石清水祭）の行われる９月15日にあわせて刊行されたと考えられる。この間、時代は明治に変わり、慶応４年鳥羽伏見の戦いによる焼失、神仏分離、廃仏毀釈のため、石清水八幡宮は大きく変化する。まず神社の名称が、明治初年「男山八幡宮」とかわり、大正７年まで続く。絵図の右下には「著者京都府平民辻村豊富、男山麓八幡荘663番地、出版人京都府平民中島敬次郎、山城国綴喜郡第１区八幡荘558番地」とある。この辻村豊富は、明治28年「官弊大社男山八幡宮略記」（京都府立大学蔵）の編集もしており、近代にも引き続き八幡宮に仕える社家であった。左下には「澱住人若林画、西京日新堂鐫」「定価金参銭」とある。若林が原画を描き、京都の日新堂が銅版画とし

て印刷したことがわかる。方位は、東西南北のある磁石に変わっている。

C「官弊大社男山八幡宮全図」（個人所蔵、39.6×54.6㎝）は、明治43年9月5日印刷、15日発行とあり、Bから32年後となる。絵図の左端には「著作者兼発行者 京都府山城国綴喜郡八幡町字八幡庄322番戸、田中俊清」と当時の宮司の名が記される。また続けて「印刷社大阪市北区天満樽屋町23番地、松田宗次郎、定価金拾銭、大阪光陽館彫刻部」とあり、印刷、彫刻は大阪の光陽館が担当した。左下に小さく「山本松雲」と印が記されている。山本松雲は、他の明治期の銅版絵図に名前を確認できることから、下絵を描いた画家と考えられる。右上には明治43年5月の年紀を持つ、「官弊大社男山八幡宮宮司田中俊清」が記した25行の八幡宮の由緒書が記される。このなかで社殿は、内務大臣より特別保護建造物に指定されたとある。この特別保護建造物は、明治30年(1897)に制定された「古社寺保存法」に基づいて初めて指定された文化財の種類である。八幡宮の社殿は同年12月28日付官報で告示された44件の一つとなった。この時から絵図の表題が左上に横書きされ、ローマ字表記となるなど、絵図様式も変更された。

これら3枚の絵図を9分割し、比較したのが分割図①～⑨(114～131頁)である。それぞれ「本殿北、狩尾社」など中心に描かれているものを表題として、幕末から明治期の絵図を並べている。その絵図中に記された文字を抽出し、3枚の絵図の変化を、左上に記している。

2.「八幡山名所案内記」「男山考古録」「城州八幡山案内絵図」情報の関連性

3枚の絵図のなかでAに対応するのが、長濱尚次が記した「八幡山名所案内記」（個人所蔵、図1）である。今回、目次と本文（98～109頁）を掲載している。長濱尚次は、竹中氏が詳細に分析しているように、八幡宮の宮工司の家に生まれ、本殿や末社の修繕や再建に携わる一方、学問を修め数々の著述もあった。この「八幡山名所案内記」は、折本形式で携帯性を重視し、各名所の説明も簡略にまとめている。そして最初の序には「宮殿仏閣の在所ハ別案内絵図に視併てしるべし」とあるように、先のA「城州八幡山案内絵図」とセットであると記される。また最後には「此外山上山下案内絵図、外にもれたる名所の委きハ、後篇に云へし」と、今回の名所以外の説明は続編を予定していたことがわかる。

この案内記の基礎になったものが、同じく長濱尚次が嘉永元年（1847）にまとめた「男山考古録」である。全15巻の膨大な書物で、八幡宮の本殿から山下の各町村の名所旧蹟まで幅広く、資料に基づき解説した八幡最大の地誌といえる。この関連のある「八幡山名所案内記」「男山考古録」「城州八幡山案内絵図」の3点の同じ項目についてまとめたものが索引（95～97頁）である。一般向けで大量に刊行されたと思われる「八幡山名所案内記」の配列を基準とし、目次と索引を同じ表に掲載した。この案内記の項目は、「東御前」など主要なものは解説より大きな字で記される。また「・」は、「東坊」などの坊を解説と同じ大きさで記す（図2)。「△」は「東谷」「馬場前」など地域を示すもの、段落下げは大項目に含まれるなど、名所の重要性に応じて書き分けている。また「○」は大項目の解説に含まれるが、案内絵図に文字として記されたもの、（ ）内は別名やふりがなのあるものなど、なるべく

原文に忠実に目次化した。それらをまとめると、項目は全部で173件、そのうち案内絵図に記されたもの123件、全体の71%である。案内記と案内絵図は、ほとんどが対応しているといってよいが、文字で記されず絵として描かれている可能性もあり、詳細な分析が必要となる。また案内記と「男山考古録」の一致件数は168件、全体の97%と高いが、項目の名称が違うものが31件18%と、微妙に変化している。一致しない5件の内3件は東谷、西谷、南谷の地域名称、2件は解説の中に含まれている道標などであり、ここからも案内記と「男山考古録」は完全に一致していると考えてよい。

参考文献　『石清水八幡宮　諸建造物群調査報告書』（本文編）・（図版編）八幡市教育委員会・石清水八幡宮、2007年

図1　「八幡山名所案内記」表紙と奥書

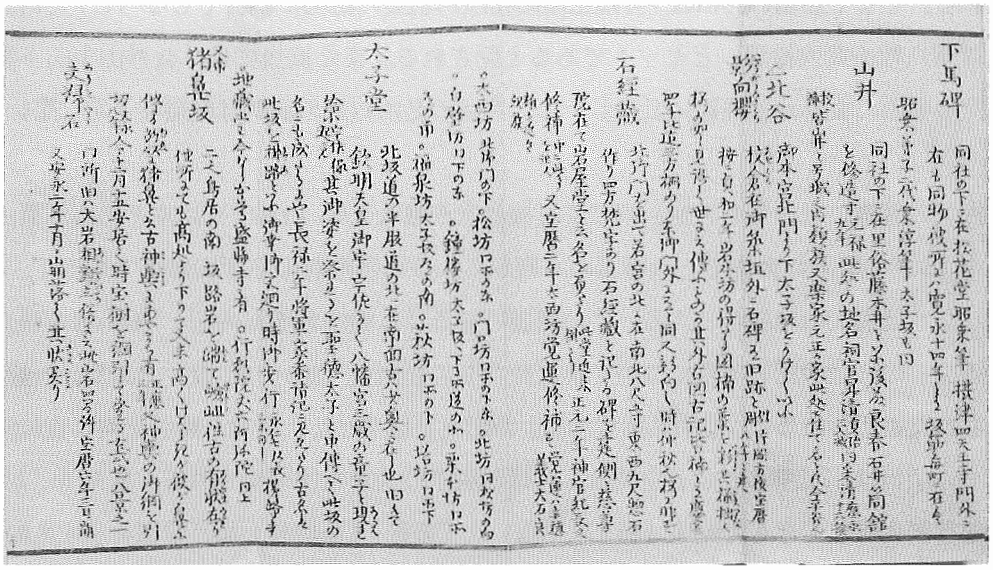
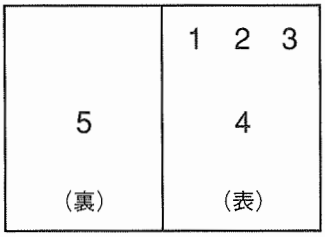


図2　「八幡山名所案内記」　本文

表紙解説



1　石清水八幡宮本殿楼門の内部

2　慶長５年５月25日「徳川家康朱印状」部分（木村家文書）

3　木村家の土蔵にて古文書を説明する故木村富彦氏

4　石清水八幡宮本殿楼門、背景に神紋

5　石清水八幡宮、鳩八幡宮・神紋

配色は、2009年３月「平成の大修造」により、鮮やかによみがえった石清水八幡宮本殿楼門の朱色を基準とした。

（写真提供　2, 3 八幡市教育委員会、1, 4, 5 石清水八幡宮）

京都府立大学文化遺産叢書　第３集

八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図
－地域文化遺産の情報化－

編　集　東　　昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）
　　竹中　友里代（八幡市ふるさと学習館主任学芸員）

発　行　京都府立大学文学部歴史学科
　　〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5

発行日　2010年３月31日

印　刷　株式会社　春　　日
　　〒630-8126　奈良市三条栄町9-18